

海の汚染で死滅するものもあるであろうし、埋立ててしまえば、全くいなくなると考えられる。恐らく、オオヒヨウタンゴミムシなどは本土では、もう生息地はないかも知れない。そのほか、いろいろな海浜の昆虫が失われたにちがいない。

もう一つの緊急課題は、マツの枯損に対する殺虫剤の航空散布であろう。現在の技術では、マツの枯損を減らすには、マツノザイセンチュウの運搬者であるマツノマダラカミキリの密度を低下させる方法しかない。そのために行われる航空散布であるが、生態系に及ぼす影響はいかにも大きい。私の知る限りでは殺虫剤に対して最も弱いのは膜翅目類のようで、空散の行われた地域ではアシナガバチなどが殆どいなくなっているのではないかと心配される。食葉性昆虫の有力な天敵が減ることは、かえって他の害虫を増加させることになるのではないだろうか。人伝に聞く所によると、ウグイスの営巣が空散の翌年では半減するということである。林業関係者では調査のできない問題である。調査法は色々あるが、関心のある方には私の用いた方法をお伝えしたいと思っている。

最後に、淡路昆虫同好会が今後さらにユニークな発展をとげ、日本の昆虫同好会のリーダーになることを祈る。

(神戸大学教授)

先山のヒメハルゼミについて

昨年(1975)の7月21日、青雲中学校生物班の梶田、山形両君が、先山東茶屋の横でヒメハルゼミ *Euterpnosia ohibensis* Matsumura の合唱を聞いていたが、本年(1976)7月22日には、青雲中学校生物班員の川臨元浩君が、先山でヒメハルゼミの♂を1頭採集した。場所は東茶屋から加茂の方へ少し下ったあたりの原生林中で、昼でも暗いようなところである。筆者も少し後で同じ場所へ行って鳴き声を聞き、また、その近くで脱皮殻を採集した。なお、合唱から推察すると鈴鶴羽山よりは少ないが、付近の環境もよく、かなりの個体が発生しているものと思う。

(梶田 久)